

中国の対トルコ政策は？

● 放眼日中



アジアを歩き回って1年半がたつ。「そろそろアジアも飽きてきた」というわけではないが、少しはみ出し、トルコへ行ってみた。同国は近年、「アラブ社会へのゲートウエー」として経済発展が注目されている。イスタンブールと言えば、アジアと中東、そして欧州を繋ぐ重要な拠点であり、さぞ中国人も多いのかと思いきや、「イスタンブールにチャイナタウンはない」と言われて驚いた。実際、観光客の姿は見掛けるものの、中華料理店は殆ど目に入らないし、地元に住み着いている「華人」がいるようにも見えない。

ある金融関係の中国人に聞くと、「トルコには資源がそれほどない。中国の政府と企業は、まずは大型投資として資源を狙うので、その対象国ではない」と、近年海外への投資が活発な中国マネーが入って来ない理由をこう指摘した。確かに、タイを見ても、中国からの大型投資は少なく、中国はインドネシアやミャンマーとタイを資源のあるなして区別していたため、これは当たっているのだろう。

因みに、カッパドキアという世界遺産にもなっている奇岩で有名な観光地でトルコ石を扱う店に立ち寄ると、欧米人や日本人の観光客はいるが、中国人は見掛けなかった。店の人にその理由を聞くと「中国人はトルコ石を高いと感じるようだ。それと同時に、観光地で売っている物は基本的に偽物だと考えており、どうせ偽物なら安く配れるものを好むので、トルコ石には興味がない」とのこと。トルコ人とは感情的にも合わないようだ。

そして、イスラム国家であるトルコには豚肉がないから、という意見もあった。確かに中国人一般が食べる肉は基本的に豚であり、骨付き豚の値段が物価の目安にもなっているぐらいだ。イスタンブールでは外国人用に豚肉を売る店もあるが、高くても耐えられない上、「豚肉のない中華料理なんて」ということになる。だが、トルコはイスラム国家といっても、飲酒は行われているし、とても戒律が厳しい国とは思えない。豚肉の調達方法も探せばあるはずなのだ。やはり一番の理由は、中国政府の新疆ウイグル自治区、ウイグル人に対する弾圧などにあるのではないかと思う。ウイグル人とトルコ人は同じトルコ系で、あれだけ地域が離れて



コラムニスト・アジアウォッチャー 須賀 努

すが・つとむ 東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。